

■ 編集だより

編集後記

私は創立約70年の精神神経疾患専門病院に勤めている卒後30年の精神科医である。先年亡くなった私の指導医のA先生の蔵書を整理し、精神医療の歴史的資料として保存すべきものを選び出し、また、研究資料として貴重な書籍と雑誌は後学の氏人に引き渡し、残った中で商品価値のある書籍は古書店に売却してその代金を精神障害者作業所に寄付する計画をご遺族と考えた。

A先生の本棚には1930年から1960年代のドイツのHandbuch, E BleulerのLehrbuch der Psychiatrie第11版、など重要と思われる書籍が多くあった。1960-70年代の精神医学関連の有名な翻訳書、日本語で出版された数々の精神医学教科書、1980年代の精神医学全書など、私にとって懐かしく今でも稀に参照する書籍が多くあった。“躁うつ病の精神病理”シリーズ(弘文堂)や“分裂病の精神病理”シリーズ(東大出版)などは、“従来診断”と“DSM診断およびICD診断”との対比の上で今でも読む価値があると思われる。

そこで、書籍と雑誌のリストを作り、医学書の古書店に見てもらったところ、捨てるには惜しい気がするが、商品としては対象になりがたく、古本の市場に出してみても引き取る人がいるかどうか危惧されるとの返事であった。おおかた予想していたことであり、商品としての価値は確かにそう思う。私が研修医のころ学んだことが、いまや大きく変わったことを実感した。精神疾患の診断基準や薬物療法が30年前とは大きく変わった。古い書籍は一部の好事家向けの価値しかないのかもしれない。

さて、精神神経学雑誌は、会員が休憩時に新着誌を手にとって、興味を持った項目に目を通すことにより、最新の診断治療の骨子を修得できるように工夫されている。精神科臨床医にとっては、刻々と変化する社会情勢に合わせた精神医療状況の変化を偏りなく取り入れることができる。この雑誌の目標は、精神科専門医の診療水準の向上と、日本語での臨床研究の発表の場の提供である。

では、精神神経学雑誌のバックナンバーの価値はどのようなものか。その時代の課題を回顧的に検討する資料と、原著論文の検索の目的であろうか。一方、古書店の情報では、精神医学関連の和文雑誌は商品価値が低いとのことである。特に発行部数の多い精神神経学雑誌はこれに当てはまる。精神神経学雑誌はバックナンバーのpdf化を進めており、いずれ図書館でハードコピーを取ることなく、学会ホームページの会員専用サイトで閲覧することになるだろう。バックナンバーへのアクセスが容易になることは会員にとっては嬉しいことである。

私は、精神神経学雑誌のバックナンバーを紐で束ねて保存しているが、同僚は興味のある号のみを保存する、あるいは、興味のある論文の部分を切り取ってカバンに入れて通勤の途上に読む、などの利用をしている。1号、2号を電車の中に置き忘れても、必要時にホームページからダウンロードできることは、このような気軽な利用を推進すると期待される。

(有馬 邦正)